戦時下の冒険科学小説
――海野十三の場合――

小泉　紘子
（玉井研究会４年）

序
Ⅰ　海野十三と科学小説
　1　経　歴
　2　科学小説への姿勢
Ⅱ　戦前～戦中の執筆活動
　1　空　襲
　2　新兵器
　3　登場人物――少年と外国人――
　4　地球防衛
Ⅲ　戦後の執筆活動
結　語

序

明治維新以降の近代化の歴史は、日本が西洋科学を取り込んでいく歴史でもあった。その中で、学術書を読めるエリート層のみでなく大衆が科学に触れるきっかけの一つとなったのが小説である。初めに、西洋の科学小説の翻訳が人々の興味を引いた。フランス語から日本語に初めて訳された小説はヴェルヌであるといわれており、一時ブームを巻き起こすほどの人気を見せたが、それらは大人だけでなく子供たちにも広く読まれていた[1)]。さらに、日本人によって書かれた科学小説も、架空の旅行記、民権運動期の政治小説、その後に現れた国権的冒険

小説など、様々な形で存在した[2)]。明治の作家押川春浪の代表作「海底軍艦」は冒険科学小説のさきがけともいえるものであった。

このような科学小説の流れは昭和戦前期～戦中にかけて、「科学する心」のスローガンとともに国策と結びついて多くの軍事科学小説を生むこととなり、多くの国民に親しまれた。特に娯楽の少ない戦時下、少年雑誌に掲載される軍事冒険科学小説が少年たちに与えた影響は少なくないだろう。それについて、多くの少年向け作品を送り出した作家・海野十三に焦点をあてて見ていきたい。

数ある作家の中で海野十三に着目する理由は３点挙げられる。

第一に、彼が非常に多作で、かつ多様な媒体に作品を発表していたことである。彼の作家人生は戦時期を跨いでいるため、時期によって執筆量に波があるが、最初のピークは昭和16年で、33篇の小説と１篇のエッセイを17の雑誌に発表している。さらに、第二のピークである昭和23年には、50篇の小説（うち連載19篇）と７篇のエッセイ・雑文を、41もの雑誌に発表している[3)]。そして、その内訳もメジャーな一流新聞・雑誌から地方紙・業界紙などマイナーなものまで多種多様である[4)]。それだけ多くの国民の目に触れたということであり、彼の影響力は少なからずあったと考えられる。

第二に、その先駆性である。まだ科学小説、現代でいうSFというジャンルが確立していなかった当時、海野は科学小説というジャンルの開拓、確立に尽力した。現に、手塚治虫[5)]、星新一[6)]、小松左京[7)]など、戦後SFの重鎮が彼に影響を受けたと発言している。海野が「日本SFの父」と呼ばれる所以である。

第三に、軍事小説の執筆が多いことである。彼は戦時中に多くの軍事科学小説を書いた。そのため、戦後は戦争に協力的だったという面にばかり注目され、小説家としての業績を評価されない時期が存在した[8)]。しかし、彼が多くの科学小説を残せたのは時代に適応したからであるし、彼が単純に日本の勝利を信じていたわけではないことも明らかになっている[9)]。むしろ彼は、日本の敗因の一つとなった科学の後進性について誰よりも憂い、その発展に尽力した人間のひとりだった。次章では、科学小説に傾けられた海野の情熱がどこから来たのか見ていきたい。

Ⅰ　海野十三と科学小説

1　経　歴

海野十三は明治30年、徳島県の藩医の家に長男として生まれた。父の仕事の関係で転居した先で神戸一中に進み、早稲田大学に進学して無線電信学を専攻したのち、逓信省電気試験所に技師として就職し、真空管の研究に携わった。

海野は中学時代から文芸に興味を持っており、級友と肉筆回覧誌を作っていた[10)]。昭和２年には大学時代の先輩らとともに科学雑誌『無線電話』誌上に「科学大衆文芸欄」を設け、科学小説の普及を図る「科学大衆文芸運動」を行っている[11)]。この運動はわずか４ヶ月で終わってしまったが、海野はこの時書いた「遺言状放送」で小説家としての商業誌デビューを果たした。翌年に『新青年』に掲載された「電気風呂の怪死事件」が一般的にデビュー作とされていたこともあり、探偵小説作家として世に認知された海野だが、そのルーツは科学雑誌にあったのである。科学小説がジャンルとして確立していなかった当時、さまざまな趣向を含有する「探偵小説」というジャンルは海野にとって貴重な場だった。

初期は『新青年』の作風にあわせて探偵小説をメインに科学トリックを多く書いているが、スパイ小説も得意としていた。大きな転機となったのが「空襲葬送曲」（『朝日』昭和７年５月号～９月号）であり、これをきっかけに軍事小説を書き始めることとなる。さらに「太平洋雷撃戦隊」（『少年倶楽部』昭和８年５月号）で少年向け小説の方面でも名をあげた。海野の科学小説は奇想天外な発想を特徴とする空想科学小説であったため、大人には受けが悪かったが、子供向け雑誌ではその奇抜さが受け入れられ、むしろ人気を集めた。そのことから海野の執筆媒体における少年向けの割合は次第に増えていくことになる。また、作家として軌道に乗りはじめた昭和11年には電気試験所を辞し、電気専門の特許事務所を開設して作家業と二束のわらじを履いた。

初期から科学知識に裏打ちされた軍事小説で人気を博していた海野は、軍とつながりを持つようになり、海軍の作家徴用の母体となるくろがね会の発足に深く関わった[12)]。昭和16年には自身も海軍報道班員として徴用され、南方に派遣された。海野は徴兵検査で第二乙種と判定されていたため入営経験がなかったが[13)]、40歳を過ぎて戦地に召されることを光栄と感じ[14)]、病弱な体で無理をして南方に赴いたものの、デング熱にかかった上、持病の結核が再発し、わずか４ヶ月で帰

国した[15]。しかし、帰国後も体験記の執筆にとどまらず病体をおして軍需工場での講演を行うなど[16]、報道班員としての活動に力を惜しまなかった。しかし、本人は日本の勝利を信じるどころか、帰国後は妻に「科学に負けてる」と漏らしており[17]、日本が負けることを予想していたようだ。それでも海野が報道班員の仕事に積極的だったのは、危機に際してそれを何とかしたいと思う素朴な感情が原動力となっていたからではないだろうか。

2　科学小説への姿勢

海野は生涯を科学小説の興隆にささげた。その熱意、動機はどこにあったのだろうか。生地徳島の「海野十三の碑」に刻まれた碑文の引用元となった有名な言葉がある。

> 生活は科学の恩恵によって目まぐるしいまでにべんりなものとなり（中略）国際関係はいよいよ先鋭化し、その国の科学発達の程度如何によってその国の安全如何が直接露骨に判断されるという驚くべくまた恐るべき科学力時代を迎えるに至った。（中略）
>
> 恩恵と迫害との二つの面を持つのが当今の科学だ。神と悪魔との反対面を兼ね備えて持つ科学に、われ等は取り憑かれているのだ。斯くのごとき科学力時代に、科学小説がなくていいであろうか。否！　科学小説は今日の時代に必然的に存在の理由を持っている。（『地球盗難』作者の言葉より）[18]

海野は科学の力を信じていたからこそその危険性もよく理解しており、日本がこれからの時代を生き残っていくためには科学力の発展が必要不可欠であると考えていた。その手段として海野が科学小説を選んだのは、彼がもともと文芸に興味を持っていたからだけではないように思われる。海野が戦時中に記した「空襲都日記」では、学者や軍人が大衆に何かを伝えようとする際、使う言葉が専門的すぎ、また小難しくて、到底理解させる気があるように思えないことを非難している箇所がある[19]。相手に伝わって初めて啓蒙になるということに海野は自覚的だった。実際、海野が科学専門誌でない一般雑誌に書いた科学解説はわかりやすさに定評がある[20]。本名の佐野昌一名義で科学解説『おはなし電気学』[21]を出版しているが、これもそのような解説書の一つで、非常に噛み砕かれた言葉に親しみやすい漫画風の挿絵が添えられ、電気の知識を全く持たない人を対象としてい

る。この本の自序で海野は、「世の中には覚えておくべきことがたくさんあるが、それをなるべく少なくし、楽な気持ちでやることができれば、われわれはしょっちゅうニコニコ顔で暮せる」と考え、この難しい仕事に取り組むことにしたという主旨のことを述べている[22)]。難解なことをわかりやすく楽しく伝えるということを、海野がいかに重視していたかが見て取れる。これらのことからわかるのは、海野が執筆活動を行う上で、自分の伝えたいことが読者に理解されることを大切にし、そのための「わかりやすさ」「ユーモア」に価値を置いていたことだ。そんな海野にとって、科学を普及・発展させるための媒体として大衆小説はうってつけだったといえるだろう。

しかし、当時の日本には科学小説というジャンルは定着しておらず、特に海野の特色である奇想を主題とした空想科学小説（今日でいう SF）には風当たりが強かった。実際、前述した「科学大衆文芸運動」では読者から「『そんな下らない小説にページを削くのだつたら、もう雑誌の購読は止めちまふぞ』とか、『あんな小説欄は廃止して、その代りに受信機の作り方の記事を増して呉れ』などという投書ばかりあって」[23)]、すぐに頓挫してしまったようだ。そこで海野が活路を見出したのが、幻想・怪奇・科学など非常に広範な趣味を内包していた探偵小説だった。当時このジャンルでは、いわゆる推理小説という言葉から連想されるような作品を本格探偵小説、それ以外の幻想・怪奇・科学などの趣向を主眼とする作品を変格探偵小説と呼んだが、海野は後者に属する作家だった。前者を至上とする作家にとっては『新青年』の懐の深さは好ましくなかったようで、作家間の探偵小説論争[24)] が巻き起こったこともあるが、海野はここで変格探偵小説を擁護する立場をとり、「変格の多さに探偵小説の将来性がある。探偵小説の範囲はどんどん広がるのが良い」といった主旨のことを述べている[25)]。探偵小説の中から科学小説が生まれてくる機会を守るための発言であろう。実際、医学博士だった木々高太郎が探偵小説の分野から小説家としてデビューしたのも海野のすすめによるものであった[26)]。

時代が下ると、戦時色が濃くなって探偵小説が書きづらくなっていく中、海野は技術畑出身ならではの科学知識を活かして軍事科学を主題とした冒険小説に活路を見出した。特に、少年向け作品では海野が得意とする奇想天外な空想科学が受け入れられやすく、海野は彼らに向けて作品を書く機会が必然的に多くなった。戦時下の娯楽が少ない中、海野の奇想は少年たちに夢を与えた。一方で、軍に協力的だった作家として戦後非難されたように、その作品群は少年たちの戦意昂揚

に資するものであった。次章からは、そうした時期の海野の執筆活動を見ていきたい。

Ⅱ　戦前～戦中の執筆活動

海野はもともと探偵小説で知られるようになった作家だが、日中戦争以後、特に国家総動員法が施行されてからは、犯罪を扱う探偵小説は排斥されるようになった[27)]。そこで、多くの作家が戦争小説や冒険小説などに活路を見出すこととなった。科学知識が豊富で防空小説なども手掛けていた海野はその分野で一歩リードした存在であり、軍に近い作家だったが、多くの軍事小説を書くようになったことでそのつながりは一層深まり、海軍情報部に作家を推薦することもあるくらい重要な地位にいたという[28)]。冒険小説が隆盛したのは、その性質上、対外進出を指向するものが多く、当時の国策と沿う部分が多かったためである。しかしここで注意しなければならないのは、必ずしも好戦的な内容が政府に歓迎されたわけではないということだ。むしろ、敵国の名前を明記せず伏字にしている作品もあることからわかるように外交上の配慮が行われたし、治安の安寧を乱すような内容と判断されれば出版が規制されることもあった[29)]。また、海野が純然たる冒険科学小説を書いていたのはむしろ探偵小説の全盛期であり、冒険小説が隆盛してくるころになると、むしろそこに空想科学の要素を強く込めた作品を多く書くようになったという指摘もある[30)]。

1　空　襲

海野は初期から空襲に対して極めて高い関心を持っており、日本で初めて防空小説を書いた作家を自認していた[31)]。「空襲葬送曲」（『朝日』昭和７年５月号～９月号）[32)] はその日本初の防空小説であったと同時に、海野が初めて手掛けた軍事小説でもあり、好評を博してのちに『防空小説・爆撃下の帝都』[33)] と改題出版された。舞台は当時から見た近未来である昭和１Ｘ年、下町・鼻緒問屋の庶民の目線から、架空の日米戦争、そして東京空襲を描いている。当時は満州事変や上海事変を通じてアジアの権益における日米の利害対立がやや表立ってきた時期で、架空の日米戦争を扱った小説が一時的に増えた時期でもあった[34)]。この作品における空襲描写には巨大飛行船が登場するなど、第一次世界大戦のイメージが色濃く反映されている。また、それ以上に特徴的なのが、執拗に生々しく描写される

空襲下のパニックによる惨状である[35]。空襲を経験したことのない日本人にも恐怖心と危機感を持たせようという意図だろうか。または、海野は関東大震災で被災しているので、その時の経験も活かされているのかもしれない。物語では空襲の被害とともに、そのような絶望的な状況下でどのような対応をすることが望ましいか、流言飛語に惑わされず、自分の出来ることで皆の役に立つこと等が、登場人物の行動を通じて読者に訴えかけられている。

この作品で一定の評価を受けた[36] 海野は軍事小説も執筆するようになり、『日ノ出』昭和８年４月号の付録「國難来る！　日本はどうなるか」に掲載された「空襲下の日本」は元東京湾要塞司令官二子石宮太郎陸軍中将との合作となっていた[37]。この作品は軍人との合作という形をとっているだけあって、防空に関する情報提供を主とした小説であった[38]。

『少年倶楽部』昭和11年７月号別冊付録に掲載された「空襲警報」では、一転してソ連による日本への空襲が描かれている。満州事変を契機とする極東ソ連軍の増強が背景にあったようだ[39]。少年向けであることもあってか、「空襲葬送曲」のような被害描写よりも、民衆による果敢な防空活動の描写がメインとなっている。その中でも毒ガス弾に対する目張りや簡易ガスマスクの作り方、焼夷弾が落ちた時には真っ先に消火することなど、かなり具体的な空襲対策を書き込んでいるところが特徴である。

このように海野は小説の題材として空襲を頻繁に扱ったが、これは軍に睨まれる要因ともなった。『キング』昭和13年６月号に執筆した「敵機大襲来」を『東京空爆』[40] と改題出版した際、題名が刺激的だったためか、大本営海軍報道部第一課長の平出英夫大佐に呼びつけられてしまったのだ。何が問題なのかわからないと反問したのに対し、東京の上空に敵機を入れることは許さない、という理不尽な理由で叱責を受けた海野は、軍の偏狭な体質を残念に感じたという[41]。

その後、海野は直接日本への空襲を描くのではなく、それを想像上の未来に託して書くという方法をとった。これは規制を免れながら社会体制を風刺するSFの典型的な手法でもある。「防空都市未来記」（初出不詳、単行本収録は『暗号音盤事件』大都書房、昭和17年）[42] はそうした作品の一つといえるだろう。20年後の日本、戦争が日常化した世界で、人々は空襲から逃れるために地下都市を築いている。爆撃の目標になるという理由で富士山を平らにならしてしまったという場面まで登場するのだ。富士山が一種のシンボルとして重要だったであろう時代に書かれた作品であることをふまえて読むと、なかなか刺激的なユーモアを感じられるの

ではないだろうか。

海野自身は昭和16年１月、費用１千円を投じて自宅裏に頑丈な防空壕を築いている[43]。14、５人も入れる広くて頑丈なものだったという。さらに、東京で空襲が始まった昭和19年末からは、「空襲都日記」と名付けて記録をつけるなど、空襲への高い関心を持ち続けた。日記によれば、自宅付近に焼夷弾が落ちた時は家族とともに消火に奔走し、自宅近辺の火災を防いだという[44]。しかし、原爆が投下されてからは、空襲警報が鳴ると真っ先に家族を防空壕に入れるようになった[45]。また、縁の下や防空壕に入れた科学書が黴や地下水で損傷してしまい、執筆活動に支障を来すという致命的な失敗もしたようだ[46]。

２　新兵器

他の軍事科学小説の例に漏れず、海野の小説にも空想の新兵器が多数登場する。しかし、海野の場合、強力な科学兵器は敵国のものであり、日本軍はその猛撃から国を守る苦しい戦いを強いられることが多い。一方で、日本軍の持つ新兵器は、現実の兵器に何かしら改良を加えた程度といったレベルのものであることが多い。そこで登場人物が日本の科学的後進性を嘆き、もっと勉強して科学を発展させなければならないと訴えるのである。もちろん、この時代の作品であるから物語は日本の勝利で終わるのだが、それは個人の資質、根性と機転、時には決死の特攻による成果として描かれた。

海野の最初期の軍事科学小説、前節でも挙げた「空襲葬送曲」は、海野作品としては珍しく、追い詰められた日本軍が新兵器「怪力線」によって大逆転をなしとげるといった内容だが、新兵器登場があまりにも唐突であり、物語を終わらせるための存在として無理に用意された感じを受ける。ちなみにこの「怪力線」は他の海野作品でもたびたび登場するが、同名の新兵器を研究する日本軍の施設は熱海に実在したという[47]。こちらはマイクロウェーブを利用して敵戦闘機のエンジンにダメージを与えるというものだったが、実現可能性は低いとされていたようだ。

「怪塔王」（『東日小学生新聞』昭和13年４月８日～12月４日）[48] は、ソ連系スパイが使う奇想天外な新兵器の数々が日本軍を苦戦させるというストーリーだ。まずタイトルにある怪塔が塔に偽装したロケットであるところからして奇抜だが、さらに「磁力砲」「あべこべ砲」といったユニークな兵器が登場する。最後は敵の新兵器をあべこべに利用して勝利を収めるという結末になっている。

「浮かぶ飛行島」（『少年倶楽部』昭和13年１月号～12月号）[49] ではイギリスが建造した超大型空母が日本海軍に襲いかかろうとするが、その作戦を知った若い日本兵が奮闘し、最終的には火薬庫に爆弾を抱えて飛び込み、自己犠牲のもとにこの新兵器を沈める。「太平洋魔城」（『少年倶楽部』昭和14年１月号～12月号）[50] はソ連が建造した海底基地を同じく日本人が苦心の末に爆破するという結末であり、「火山島要塞」（『少国民新聞』昭和18年12月22日～20年３月31日）[51] でアメリカの新兵器怪力線を備えた火山島要塞を倒すのも、多くの日本兵の犠牲を前提とした特攻に近い作戦である。

このように、海野から見れば当時の日本の科学力では単純な兵器対兵器の対決において到底勝ち目がないと見えたのだろう。そこで、科学力の向上を訴えつつ、物語を娯楽として成立させ、また時局に即した結末を迎えさせるために、大和魂や個人の資質といったものを持ち出してきたのだろうと思われる。

３　登場人物――少年と外国人――

海野の作品には少年向けのものが多い。当然、そのような小説で活躍する主人公の多くは少年である。特に戦時中のものでは少年兵が登場することもあり、大人の兵士と同じ、またはそれ以上の活躍をする。これらは多くの少年に少年兵への憧れを抱かせることになっただろう。

特に海野作品の少年に特徴的なのが、冒険心だけでなく科学への豊かな好奇心を持っていることである。これは海野が科学小説を指向していたから当然ではあるが、中には少年が大人顔負けの科学知識を持っていたり、自身の発明品によって活躍する作品もある。「怪鳥艇」（『少年倶楽部』昭和16年１月号～12月号）[52] は、南方の島を舞台に、日本企業が開発した小型で快速の飛行機兼潜水艇を少年たちが自由自在に操り、アメリカの軍人をやっつけるという話である。また、「未来の地下戦車長」（初出未詳、昭和15～16年頃）[53] では、地下戦車という新兵器の着想を得た少年が、その実現のために試行錯誤を重ね、成人して軍の機械化部隊に入り、数年越しの努力が実って地下戦車の実用化にこぎつける。発明とまではいかなくても、少年が電信や機械の知識を活かして活躍する作品はいくつも存在する。少年に科学を志してほしいという海野の願いが、戦時の要求に即した形で表現されている。

次に、海野作品に登場する敵兵は基本的にどこか憎めない、ユーモラスなキャラクターとして描かれているということを特徴として挙げることが出来る。これ

には例外もあり、イギリス人やユダヤ人はずる賢く、残忍に描かれることが多い。前述の「浮かぶ飛行島」（昭和13年）では、日本を叩き潰そうとする敵国（イギリス、ソ連など）の陰には世界の支配を目論むユダヤ人の陰謀があるという設定や、イギリスの軍人が巨大空母建造に携わった各国の労働者を口封じのため皆殺しにするという場面がある。他にユダヤ人を悪者として描いた作家には、海野と同じく冒険小説の大家だった山中峯太郎がいる。彼は昭和７～８年にかけて『少年倶楽部』で「大東の鉄人」を連載しており、主人公の敵として日本を滅ぼそうとするユダヤの秘密結社シオン同盟を登場させた。イギリス人を残忍に描いた点については、昭和13年という時期を考えると、日中戦争の初期にイギリスをことさら敵視した政府、また必要以上に対英憎悪を煽った新聞の論調[54]とおおむね一致した傾向といえるのではないだろうか。一方で、日米開戦によってアメリカ人の性格が残虐に描かれるようになったかというと、必ずしもそうとはいえない。終戦間近の作品として、前述した「火山島要塞」（昭和18年12月～20年３月）[55]がある。その中ではアメリカを科学力世界一の強敵と認める日本兵の台詞がある一方で、アメリカの軍人についてはコメディタッチに描かれており、新兵器の設計図を紛失して日本兵に奪われるといった間抜けさも見せる。仇討ちを扱う場合も、それは主に日本兵側の決意として語られ、敵の残忍さを強調して敵愾心を煽るという形を取ることは少なかった。これは当時の報道が、アメリカの強さを認めるのみならず執拗にその残虐性を強調し始めた[56]のと比べると、かなり抑制された表現だといえるだろう。

また、外国の元首が実名で登場することも少ない。例外はユーモア小説の金博士シリーズ（『新青年』昭和16年～19年）[57]である。このシリーズでは、兵器発明の天才である金博士（上海に住み、「アジア人」を自称する無国籍者）のもとに各国の要人が訪れ、発明品を譲ってくれるよう依頼し、望み通りになるが、博士の策略や運命のいたずらであべこべに自国の軍がやられてしまう、というのが一つのパターンになっている。登場するチャーチルや蔣介石、ルーズベルトは主人公の金博士にやり込められる間抜けな役柄であり、敵愾心を煽るように描かれているとはいえない。ユーモア小説だからということもあるだろうが、それを好む海野の嗜好が人物造形にも表れていたといえるのではないだろうか。

4　地球防衛

海野の軍事小説は全体として対外進出よりも防衛を主題とする国防小説の様相

を強く帯びているが、海野にとって防衛は日本の問題にとどまるものではなかった。その延長線上には常に、宇宙戦争、すなわち宇宙からの侵略者に対する地球防衛を想定していたのである。これはいかにも荒唐無稽なおとぎ話のように聞こえるかもしれないが、海野にとって宇宙戦争はあくまでの現実の戦争の延長上にあるもので、いつか空から来るであろう侵略者に備えて科学力を向上させることは人類の存亡に関わる問題だった。その真剣さは、海野が自身の創作以外の場面でも地球防衛問題を持ち出している点から理解できる。司会を務めた「科学者ばかりの未来戦争座談会」（『新青年』昭和12年８月号）では工学博士に対して宇宙戦争の可能性について質問しているし[58]、終戦後のエッセイ「原子爆弾と地球防衛」（『光』昭和20年10月号）[59] では原子爆弾の発明が地球防衛における一つの強味になるとし、人類は地球上での戦争をやめ、協力して宇宙からの侵略者に備えるべきだと述べている[60]。

作品としては「或る宇宙塵の秘密」（昭和10年）という短編から始まって、長編だけでも「地球盗難」（『ラヂオ科学』昭和11年、連載期間未詳）、「火星兵団」（『大毎小学生新聞』『東日小学生新聞』昭和14年９月24日～〈大毎〉昭和15年12月31日〈東日〉同年12月30日）、「地球要塞」（『譚海』昭和15年８月号～16年２月号）と複数の人気作品を書いている。特に「宇宙戦隊」という作品が『海軍』昭和19年５月号～20年３月号に連載されていた事実は興味深い。『海軍』は昭和19年５月に海軍省後援のもとで大日本雄弁会講談社が創刊した少年雑誌だが、「宇宙戦隊」では海軍の活躍など全く描かれない。日本が敗戦に向けて刻一刻と近づいていたこの時期に、海野の目は宇宙へと向けられていたのである。地球防衛はいわば海野のライフワークだったといってもいいだろう。

海野の作品に登場する宇宙人は、ほとんどが地球人よりもはるかに発達した文明と科学技術を持っている。これは、海野が通常の戦争を描く時、敵国にばかり強力な新兵器を持たせるのとよく似ている。そして登場人物の口を借りて海野が繰り返し語るのは「地球人（日本人）が宇宙（世界）で一番すぐれているなどと思い上がってはいけない」ということである。海野にとって、日本の防衛のために科学を向上させることと、地球の防衛のために科学を発展させることはやはり同一線上にあったのだろう。

Ⅲ　戦後の執筆活動

海野は終戦直後に一家心中を試みている。これは敗戦の失意によるものとも、自身の執筆活動への責任を感じてのこととともいわれている。結局、異常を察した作家仲間や医師の説得により思いとどまり、やがて科学小説への熱意を取り戻した海野は、結核で死期が近いことを悟っていたこともあり、かつて以上に精力的に執筆活動に取り組んだ。昭和20年12月31日の日記には「生命ある限りは、科学技術の普及と科学小説の振興に最後の努力を払わん」[61] との決意が示されている。ちょうど戦後の児童雑誌創刊ラッシュにあたったこともあり[62]、以前から少年向け小説の分野で熱い支持を得ていた海野はそちらへと完全に軸足を移した。

戦後作品の特徴として、当然のことではあるが戦争を肯定的に書いたものはない。戦前から引き続いて宇宙人との衝突を扱ったものは多いが、交渉による解決に主眼が置かれる。これは海野の心境の変化というだけでなく、検閲の影響でもあるだろう。戦争を描いた長編としては「怪星ガン」（『冒険少年』昭和23年１月号～24年３月号）[63] がある。異星の文明に遭遇した地球人の目線から、その文明社会の先進性を紹介しながら、最後にはその文明がより強大な他の文明との戦争によって滅ぼされ、失われていくという結末を描く。ここでも、弱肉強食の宇宙（世界）で生き残るためには科学の発展が必要だという海野のメッセージが語られている。

また、戦後になって特に目立つようになるのが原子力の多用である。効率的な理想のエネルギー源として扱われ、宇宙船から建設機械にいたるまで幅広い分野で原子力エンジンが使われる。そうして原子力の利便性を強調するわりには、その原理についてほとんど説明していない。海野にしては珍しく非科学的な態度である。しかし、海野は原子力を必ずしも理想のエネルギーとしてのみ見ていたのではない。事実、大人向けの作品「予報省告示」（『トップライト』昭和22年10月号）[64] では原子爆弾によって地球が滅ぶ可能性を書いているし、前述した「原子爆弾と地球防衛」や「空襲都日記」「降伏日記」でも原子爆弾の危険性に言及している。さらに遡って、デビュー作の「遺言状放送」からして、原子核実験の失敗で惑星が滅亡する物語なのである。にもかかわらず、なぜ海野は原子力を夢のエネルギーのように描いたのだろうか？　敗戦後の子供たちに向けて、海野は科学の夢の側面を強調して語りたかったのだろうか。特に原子力が次世代のエネル

ギーとして重要になることが確実であった以上、少年たちにはその無限の可能性を示し、興味と夢を持ってもらうことを優先したのかもしれない。

結　語

海野は政治・思想面で強い主張を持った人物ではない。どの時代もおおむね世相に寄り添って、人々に受け入れられるものを書いてきた、あくまでも大衆作家である。しかし、彼は一貫して日本の科学的後進性を憂い、科学の普及、発展のために尽くすという強固な目的意識を持っていた。そのためには作家間のジャンル論争に口を出すことも辞さなかったし、自身の作品に軍から理不尽な注文を加えられれば反問する気概も持ち合わせていた。一方で、当時担い手の少なかった科学小説の振興を至上目的とするならば、自身の生活の糧と執筆機会を失うような行動をとらなかったのは当然であろう。日記では軍に対して冷ややかな目線を向けることもある海野がそれを表に出さず、むしろ軍との関係を深めていった背景には、そのような理由も一つとしてあるのではないだろうか。そんな科学小説への情熱が「科学する心」をスローガンとする時代の波に乗って開花したのが彼の作品群である。そして、それらを読んだ少年たちの中から戦後の空想科学小説、SF を牽引する作家たちが現れ、彼等の作品を読んで科学に夢を抱いた少年たちの中から日本の科学技術を支える科学者、技術者が現れてきたことを考えると、海野の目的は達成されたといえるのではないだろうか。

1）　横田順彌「解説」（横田順彌編『少年小説大系　第８巻　空想科学小説集』三一書房、1986年）538頁。
2）　長山靖生『日本 SF 精神史―幕末・明治から戦後まで』（河出ブックス、2009年）。
3）　横田順彌「海野十三の執筆媒体」（『近代日本奇想小説史　入門篇』ピラールプレス、2012年）231-232頁。
4）　同上。
5）　手塚治虫「わが思い出の記」（『手塚治虫全集４』鈴木出版、1965年）。
6）　星新一「空想科学の時代」（前掲、『少年小説大系　第８巻　空想科学小説集』月報３）２頁。
7）　神戸新聞文化生活部『ひと萌ゆる　知られざる近代兵庫の先覚者たち』（神戸新聞総合出版センター、2001年）181-183頁。
8）　根本正義「戦後児童出版界と海野十三」（紀田順一郎、小松左京編『海野十三全集』別巻１、三一書房、1991年、付属冊子「海野十三研究13」）６-10頁。

9）「海軍の報道班員として、昭和十七年一月四日に大阪から機雷を積んだ輸送船に乗っていったんですが（中略）五月初旬に帰ってきてからは、もう勝つとは言わなくなりました。『科学に負けてる』といって……」（佐野英「夫・海野十三の思い出」＜會津信吾編『少年小説大系　第９巻　海野十三集』月報４、三一書房、1987年＞１頁）。

10）前掲、『ひと萌ゆる　知られざる近代兵庫の先覚者たち』180頁。

11）前掲、『日本 SF 精神史―幕末・明治から戦後まで』151-153頁。

12）「くろがね会愈発足」（『東京朝日新聞』1941年８月17日朝刊）。

13）「海野十三　年譜」（前掲、『海野十三全集』別巻２、1993年）653頁。

14）前掲、「夫・海野十三の思い出」１頁。

15）前掲、「海野十三　年譜」655頁。

16）「終戦直前の昭和二十年から喀血がはじまったんですが、それを押して各地の工場へ講演に出かけました。というのも、戦地にいった者の講演でないと工場でウケないからなんです」（前掲、「夫・海野十三の思い出」３頁）。

17）同、１頁。

18）「『地球盗難』の作者の言葉」昭和12年４月、ラヂオ科学社（前掲、『海野十三全集』別巻１）。

19）「十二月二十五日（中略）田口泖三郎氏の B29の爆音聞き分け方の放送が始まり、つづいている。難解だ。普通の人には、あれではわかるまい。述べ方に工夫がほしい。日本の学者というと、なぜこのように人に伝授の仕方が拙いのだろう。飛行士の養成に手間どり、生産増大できないのも、皆こんなところに大きな原因がひそんでいるのだと思う」（「空襲都日記」昭和19年、前掲、『海野十三全集』別巻２、17頁）、「十二月二十八日（中略）情報はもっとやさしくすべきである。いつも小むずかしくいう軍人の頭の具合にも困ったものである。目で見る字と、耳から聞く言葉とに大きな隔たりがあることぐらい、わかっていさそうなもの、大衆相手の情報なんだから、大衆向きにして出すよう考えるのが当然だ。と思う識者はいないのか、識者がいても自分の責任範囲外のときは言わないのか。すでにうるさいほど指摘された官軍民一体化総蹶起のガンはここにあるといわざるを得ない」（同、20頁）。

20）横田順彌「解題」（前掲、『海野十三全集』別巻１）。

21）明治書院、昭和14年10月。

22）「おはなし電気学（抄）」（前掲、『海野十三全集』別巻１）220-221頁。

23）前掲、「『地球盗難』の作者の言葉」（前掲、『海野十三全集』別巻１）397頁。

24）甲賀三郎や浜尾四郎といった本格派の作家と、大下宇陀児や海野十三といった変格派の作家が雑誌や著書の上で意見を交わした。のちに甲賀は『ぶろふいる』1935年１月号～12月号に連載した「探偵小説講話」の中でも「本格探偵小説というものは、要するに犯罪捜査小説であり、それに適当な謎とトリックを配し、読者に推理を楽しませるもの」とし、それ以外のものは海外では違う名で呼ばれて

いるのだから、日本でも「宜しく他の名称を附すべき」と意見を表明している（中島河太郎編『現代推理小説大系　別巻２』東京創元社、1980年）。

25）　海野十三「探偵小説管見」（『新青年』昭和９年10月号）で「私はわが国の探偵小説に変格の多いことをそんなに慨いてはいない。むしろ変格の多いという事に探偵小説の将来性を認めている（中略）そして其の意味に於ての探偵小説は、もっと勇敢に、新しい型を求め、此処ぞと思う方向にドンドン拡大してゆくのがよいと考えるものである」と述べている（前掲、『海野十三全集』別巻１、325頁）。

26）　前掲、『日本 SF 精神史―幕末・明治から戦後まで』158頁。

27）　内務省警保局『出版警察報』第115号（昭和13年11月）17-19頁によると、「大衆雑誌の記事浄化指導」として同年９月５日、東京市で発行されている13大衆雑誌『講談倶楽部』『オール読物』『日之出』『富士』『モダン日本』『キング』『現代』『雄弁』『新青年』『講談雑誌』『話』『実話雑誌』『実話読物』の編集当事者を内務省に招致し、「恋愛小説」「股旅小説」「その他社会風教上悪影響ある事項を興味本位に取扱たる記事」に対して改善指導を行ったとある。また、同『出版警察報』第117号（昭和14年６月）54頁によれば、江戸川乱歩『黒蜥蜴』（新潮社、同年３月）の一部が「猟奇的探偵小説にして卑猥残忍に亙る点あるに因り」削除されている。江戸川乱歩「探偵小説四十年」によると、軍の情報局に顔が利く海野が情報官と探偵作家の対談の場を設けたことがあり、「情報局はなぜ探偵小説を目のかたきにするのか」の真意を探るべく「書いてよいことと、悪いことの境界線は、どこに引いたらいいのか」を議題とした。しかし、その内容は乱歩の記憶に残るようなものではなく「この会合の結果として、探偵小説が書けるようになったわけでもなかったのである。やっぱりスパイ小説以外は雑誌が頼みに来なかった」という（『江戸川乱歩全集　第29巻　探偵小説四十年（下）』光文社文庫、2006、85-87頁）。

28）　前掲、「探偵小説四十年」によると海野は「『新青年』に日米未来戦というような戦争小説を書いたことから、海軍に知り合いが多くなり、戦争に理解ある文士として、その方面の信頼を得ていた。随って軍部に対する顔もよく、何かと相談をかけられる立場にあった」「同君はますます多くの軍事小説を書き、軍部や情報局の信望を得て、従軍作家の推薦などにも、海野君の意見が重きをなすほどになっていた」（前掲、『江戸川乱歩全集　第29巻　探偵小説四十年（下）』82、327頁）。

29）　例として、長野邦雄の小説『太平洋行進曲』（新作読物刊行会、同年４月）が禁止処分になっている。理由は「日米未来戦記にして日本より宣戦を布告し日本軍太平洋、大西洋の封鎖作戦に成功して×国大統領を屈服せしむると言う筋にして戦争の記事荒唐無稽なる少年読物なれども×国が米国を指すこと明白にして戦争を挑発し国交を阻害する虞あるものなるに因る（後略）」（前掲、『出版警察報第106号』昭和12年８月、25頁）。

30）　前掲、『日本 SF 精神史―幕末・明治から戦後まで』164頁。

31）　前掲、『海野十三全集』別巻２、159頁。
32）　前掲、『海野十三全集』第１巻、1990年。
33）　博文館、昭和７年12月。
34）　長山靖生「解題」（前掲、『海野十三全集』第１巻）433頁。
35）「避難路の前面に、瓦斯弾が落ちたらしく、群衆は悲鳴をあげて、吾勝ちに、引っ帰してきた。それが、市内の方から、押しよせてくる何万、何十万という、まだ瓦斯弾の落ちたことを知らない後続の避難民と、たちまち正面衝突をした。老人や、女子供は、呀ッという間もなく、押し倒され、その上を、何千人という人間が、踏み越えていった。瞬く間に、新宿の大通には、千四五百名の死骸が転った。その死骸は、どれもこれも、眼球はポンポン飛び出し、肋骨は折れ、肉と皮とは破れて、誰が誰やら判らない有様になった。すこしでも強い者、すこしでも運のいい者が、前に居る奴の背中を乗越え、頭を踏潰して、前へ出た。腰から下半身一帯は、遭難者の身体から迸り出た血潮で、ベトベトになった」（前掲、『海野十三全集』第１巻、357頁）。
36）　ただし、軍部には不評で増刷禁止処分を受けたらしく、「東京への空襲」という題材に軍が神経を尖らせていたことがわかる（前掲、『日本SF精神史』163頁）。
37）　新聞広告でも２人の合作であることが明記されている（『読売新聞』昭和８年３月２日朝刊）。
38）　瀬名堯彦「解題」（前掲、『海野十三全集』第３巻、1988年）310頁。
39）　瀬名堯彦「解題」（前掲、『海野十三全集』第４巻、1989年）389頁。
40）　ラヂオ科学社、昭和13年。
41）「『なぜ、東京空襲を小説にしてはいけないのか、私には理解できない！』海野が反問すると、平出大佐はテーブルを叩いてどなった。『帝都上空には、敵機は一機も入れないのだ！』自分たちの気に入らぬ言論はいっさい通用させまいとする軍人特有の偏狭さが感じられ、海野は残念で、夜も眠れなかった―と、これは英夫人から私が直接聞いた話である」（橋本哲男「愛と悲しみの祖国に」＜『海野十三敗戦日記』中公文庫BIBLIO、2005年＞152頁）。
42）　長山靖夫編『海野十三戦争小説傑作集』中公文庫、2004年。
43）　前掲、『海野十三全集』別巻２、655頁。
44）「空襲都日記」昭和19年５月26日（前掲、『海野十三全集』別巻２）56-58頁。
45）　會津信吾「解題」（前掲、『海野十三全集』第９巻、1988年）333頁。
46）　前掲、「夫・海野十三の思い出」２頁。
47）　島本光昭「異色の児童SF作家・深山百合太郎」（會津信吾、横田順彌編『少年小説大系　第18巻　少年SF傑作集』月報13、三一書房、1992年）５－６頁。
48）　前掲、『海野十三全集』第６巻、1989年。
49）　前掲、『海野十三全集』第５巻、1989年。
50）　前掲、『海野十三全集』第６巻。
51）　前掲、『海野十三全集』第10巻、1991年。

52）　前掲、『海野十三全集』第９巻。

53）　前掲、『海野十三全集』第７巻、1990年。

54）　玉井清「日中戦争下の反英論―天津租界封鎖問題と新聞論調―」（『法学研究第73巻　第１号』慶應義塾大学法学研究会、2000年１月）。

55）　前掲、『海野十三全集』第10巻。

56）　玉井清『戦時日本の国民意識―国策グラフ誌『写真週報』とその時代』慶應義塾大学出版会、2008年、第10章「『写真週報』に見る英米観とその変容」。

57）　前掲、『海野十三全集』第10巻。

58）「地球上の人類より優秀な生物が他の遊星に居て、それが地球を捕虜にしようと思って地球へ働きかけて来るのが先か、地球から行くのが先か、そこは分かりませんが、隈部さん何かそういう方面について……」と、司会の海野が工学博士の隈部一雄に話を振っている。他の参加者は田辺平学（工学博士）、竹内時男（理学博士）、川原田政太郎（工学博士）、林髞（木々高太郎の本名、医学博士）（前掲、『海野十三全集』別巻１、470-471頁）。

59）「アメリカが原子爆弾の製作に成功したと知ったとき、私は敵味方の関係を超越し、広島の惨害をも超越し、科学技術史上画期的なるこの成功に関しアメリカに対し祝意と敬意とを捧げざるを得なかった。（中略）祝意と敬意を表したことについては、私が技術者であることから分ってもらえると思うが、その外に、かねてから私の抱懐する『地球防衛問題』が、原子爆弾の発明完成によって飛躍的な強味を加え得たことによる」（前掲、『海野十三全集』別巻１、306-310頁）。

60）　これについては、宇宙に目を向けさせて地球上の戦争を止めさせるための方便だったという見方もある（「人類どうしの殲滅戦を回避するために、海野はひとつの主張をはじめる。それが『地球外の戦い』だ」＜會津信吾「解説」、前掲、『少年小説大系　第９巻　海野十三集』539頁＞）。しかし、昭和16年に単行本化された『火星兵団』の「作者の言葉」を見ると、海野にとって宇宙人の襲来が真実味をもった題材だったこともまた確かだと思われる（「私の考えでは（中略）地球以外の星に、人間と同じか、或はもっとりっぱな頭脳をもった生物がすんでいるはずだ、そういう者から、地球が攻撃をうける日があるだろうということを警戒して、科学を勉強してください（中略）嘉永年間、浦賀へアメリカの黒船が来たとき、日本人はおどろきましたように、大宇宙の黒船は、いつ地球へ、とつぜん姿をあらわすかもしれない状態にあるのです」＜前掲、『海野十三全集』第８巻、1989年、432頁＞）。

61）「降伏日記」（前掲、『海野十三全集』別巻２）86頁。

62）　池田憲章「解題」（前掲、『海野十三全集』第12巻、1990年）561頁。

63）　前掲、『海野十三全集』第13巻、1992年。

64）　同上。